

展評

「引き裂かれる光」展

セゾン現代美術館、2012年7月6日～9月30日

宮崎 薫

軽井沢のセゾン現代美術館のコレクション展に行くこと、それは、茶会に出向く時の気持ちと重なる。緑あふれる道が途切れると、わずかに開いた門扉がある。ここが美術館の入口かと思えらうが、そのさりげなさは、茶室に続く門のようでもある。床の間には、何が掲げられているのだろう、お道具の取り合わせはどうだろう、そんなことを思い浮かべながら、期待感と緊張感を合わせ持ち、茶会に向かう、そんな気分に近いのである。

2012年夏のコレクション展のタイトルは、「引き裂かれる光」。「青」、「紫」、「赤」の三色をテーマとし、美術館が所有する約500点のコレクションの中から選ばれた作品で、各展示室は構成されていた。また、青は“カタストロフィー”、紫は“まぶさび”、赤は“イリュージョン”のサブテーマが設定されていた。青は、表象文化論・現代哲学を専門とする小林康夫（東京大学大学院総合文化研究科教授）、紫は、哲学者・美学者であり詩人の篠原資明（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、赤は、難波英夫（セゾン現代美術館館長）の監修であった。

大きな茶会では、濃茶席、薄茶席、立礼席が設けられ、点在する茶席を行き来する。各々の席で茶を味わいながら、全体の連関も楽しみ、時を過ごす。今回の展覧会では、各展示室は、特定の色をテーマに構成され、独自性を保ちつつ、全体で大きなテーマを共有していた。まるで三つの茶席が用意された茶会を振り返るように、「引き裂かれる光」展を紹介したい。（実際に、会場内で、特別企画として、9月1日、「青の茶会」が開催された。）

■ブルー・カタストロフィー ～『青の美術史』 その後の歴史

今終わろうとしているこの二十世紀という時代を考えると、ある意味では、青の世紀、つまり強いて言えば、青の発見の世紀ということにならないか¹

1 小林康夫『青の美術史』ポラ文化研究所、1999年、P7

「青」の会場を担当した小林康夫は、著書『青の美術史』の冒頭で、二十世紀は「青の世紀」という予感を示し、巻末では、人間が世界を表象する仕方の「歴史」には、「青い夢のような稲妻がそこそこに光っている」と締めくくっている。

2012年の今、果たして「青」は、夢と単純に結びつくのだろうか。

エントランスを入ってすぐの回廊には、サム・フランシスの雲を連想する作品が並び、「青」の旅へいざなう。1階奥の小展示室は、ヴィクトル・ヴァザルリの《J.S.バッハ》(1973) 14点が、四面の壁に取り囲むように配されている。足下には、イヴ・クラインのブルーのタペストリー。靴を脱いで、ブルーの絨毯の上に正座をし、目を閉じると、音楽が響いてきそうな静謐な空間である。

1階の大展示室が「青」のメイン会場。正面の壁には、黒田アキの《Blue MAGMA》(1998)、その前にマグダレーナ・アバカノヴィッチの《ワルシャワ—40体の背中》(1990)が並ぶ。片隅には、まるで空から落ちてきたかのように、アニッシュ・カプーアの《Angel, 1990》(1990)が配されている。左右の壁には、ジャクソン・ポロックの《ナンバー9》(1950)とイヴ・クラインの《海綿レリーフ (RE50)》(1958)が対峙するように掲げられている。入口の壁には、ピエール・スーラージュの《絵画、1974年1月4日》(1974)、エルズワース・ケリーのリトグラフが展示されている。

「青」の空間に漂うノイズ。その音源は、会場手前に転がっている古い形の二つのテレビ。傾いたモニターからは、この会場の監修者である小林康夫による「青の講義」が流れている。しかしながら、二つのモニターから流れる声がずれていて、互いに打消しあうため、耳を傾けても、講義の内容は良く理解できない。今、この「青」の空間で、いったい何が起きているかもわからない。

9月1日、〈無心伽藍〉と名付けられたこの会場で、「青の茶会」が開かれた。《Blue MAGMA》の前でお点前、《ワルシャワ—40体の背中》の前で舞踏が繰り広げられた【写真1】。心の中は、膨大なノイズでざわつく。手渡された薄茶を一服、飲み終えても、からだに残るノイズ。

2012年の今、「青」は、単純に夢と結びつくものではなく、拭い去ることのできないノイズと痛みを伴うものである。だからこそ、「青」という色も生命も、輝きが増すのだろう。

■ [むらさき] ～ 滝の前で立ち停まる人

「うわぁ、むらさき」。背丈1メートルにも満たない子どもが、この部屋に足を踏み入れた時にもらした言葉である。展覧会の構成など、何も知らない小さなからだは、部屋にあふれる [むらさき] のしぶきを浴びたのだろう。

しぶき飛びちる滝も、その始まりはかすかである。1階からの緩やかなスロープを上った先にある踊り場は、茶室に例えると、床の間のような場である。床には、掛物と花入が付き物である。ここでは、掛物は、ルーチョ・フォンタナの《空間概念—期待》(1965)、花入は、この会場の監修者である篠原資明の自作オブジェ《まぶさびサイコロ滝》(2012)【写真2】。透明のフラワーベースの中には、紫のサイコロがひとつ入っている。この小さなサイコロから、滝が、[むらさき]の会場が始まる。

中2階展示室が[むらさき]の空間で、吉澤美香、中西夏之、中村一美、加納光於らの作品に加え、監修者の自作オブジェで構成されている。展示の半数近くを占めるのが、中西夏之の作品である。色に関して、中西は「時間が現象のリズムに持続を与えるように、色彩も現象の変化に必ずといっていい程、立会い、充満し、馳けまわり、君臨しているので、色彩を何とか飼いならし、手中におさめることが画家の本領であると思えてしまう？」と述べている。そして、「画家の本領は本来、時間なのだが、現状では色彩がそれにとってかわってくれているにすぎない」と続けている。紫は、中西にとって重要な色であることは、「紫・むらさき」展(1983)を開いたことからもうかがえる。中西は、次のように言う。

紫色は絵の一要素ではなく、絵を破壊するような要素だ。紫色は祈るように塗る。紫色は自己放下のゆきつくところまでゆきついた底から、起きあがる時の手だすけのような感じで塗る。

そして又、自己放下そのものの体の感じをともなって、紫色はやわらかく、おだやかに、やさしく塗る。³

人はなぜか、滝の前で立ち停まる。滝に打たれる。紫色を祈るように塗った中西の絵の前で、人はふと足を停める。「立ち停りの儀器」⁴として企てられた中西の絵の前で、足を停めると、紫の絵に取り囲まれ、紫の滝しぶきに打たれている自分に気づく。

2 中西夏之「立ち停りの儀器」『大括弧 緩やかにみつめるためにいつまでも佇む、装置』筑摩書房、1989年、P151

3 中西夏之「遠くの画布、目の絵 作業から作業への結び目=瞬間のために」同上、P136

4 中西夏之「立ち停りの儀器」同上、P150

まぶしさの、さびしさに、ふりそそぐ

[むらさき] 会場の監修者で詩人の篠原資明のこの一行詩で示されるのが「まぶさびの滝」。「まぶしさ」と「さびしさ」を掛け合わせた造語が「まぶさび」である⁵。

会場の片隅には、監修者のもうひとつの自作オブジェ《まぶさび概念—回顧》(2012)【写真3】が、透明なテグスで吊り下げられている。糸のように細く長い透明なテグスは、作家にとって滝を意味する。

「まぶさび概念」がわからなくても、[むらさき] 会場という儀器・装置の中で、紫の滝しぶきに打たれてしまったら、概念を体認してしまうのかもしれない。「うわあ、むらさき」と無邪気につぶやいた少女でさえも…。

目の前に差し出された茶碗を掌にのせ、さびしさを味わう濃茶席、それが[むらさき]の展示室であった。

■レッド・イリュージョン ～ 大地と火と血

2階の「赤」の会場に足を踏み入れると、目に飛び込んでくるのは、マーク・ロスコの《ナンバー7》(1960)。床に並んでいるのも作品のようだ。踏まないように恐る恐る歩いていると、突然、ジャン・ティンゲリーの《地獄の首都 No.1》(1984)が、動きだし、鳴り響く。

なんだか賑やかで、会場の様子をつかめず、とりあえず、手前の椅子に腰かけて、ティンゲリーの作品を眺め、耳を傾ける。それは、茶会でいうと、立礼席で、まずは一服という行為に近い。

「赤」の会場を構成するのは、ロスコ、ティンゲリーに加え、ロイ・リキテンスタインの《赤ワインのある静物》(1972)、アンディ・ウォーホルの《ポートフォリオ (毛沢東)》(1972)、セザールの《TOKYO 圧縮》(1982)、《イエス・コーク》(1982)。日本の作家、宇佐美圭司、辰野登恵子、オノサトトシノブ、依田寿久、横尾忠則らの作品も並ぶ。

これらの作品で構成される「赤」の会場に通底するのは、次の詩である。

たとえ敗れた戦いであっても
いや 敗れた戦いだったからこそ
流れた血はいつまでも鮮やかなのだ

5 篠原資明『まぶさび記』弘文堂、2002年、P11

それは決して果実を生まない
栄える町とはいつまで経っても混ざらないから
(辻井喬『わたつみ・しあわせな日日』から)

「赤」は、血の色であると同時に、火や大地の色でもある。「赤」の会場の地面を見つめると、フィリップ・カザルの《前方へ後退》(1998)が並んでいた。

□「青」と「赤」のあいだ

「青」、「紫」、「赤」の三つの会場は、各々の色をテーマに選ばれた複数の作品が並んでいるにとどまらず、部屋そのものがひとつの大きな作品でもあった。

地球の内側には赤いマグマがあり、青い天空が地球を優しく包んでいる。ガガーリンの言葉に象徴されるように青い地球、「青」へと夢を託した二十世紀を経て、〈3.11〉の後、赤いマグマの存在を、地球の営みそのものを改めて意識している。今、私たちは、地球と共振し、「引き裂かれる光」のまぶしさを受け、痛みやさびしさを伴いながら、「青」と「赤」のあいだを生きている。



【写真1】特別企画「青の茶会」会場風景
(2012年9月1日、於：セゾン現代美術館)



【写真2】篠原資明《まぶさびサイコロ滝》(2012年)
展示風景



【写真3】篠原資明《まぶさび概念一回顧》(2012年)

写真提供(3点とも):財団法人セゾン現代美術館